

## J.S.バッハの作品

### フルートと通奏低音のためのソナタ BWV1034

自筆譜がなく作曲年代は諸説あるが、ケーテン時代の 1720 年頃とされる。4 楽章からなり、緩／急／緩／急の教会ソナタ形式を採用している。バッハらしい充実した作品で、第 1 楽章は、哀調を帯びたフルートの旋律と通奏低音の静かな対話が印象的。第 2 楽章は、軽快な主題展開のあと、長めの間奏が続く。第 3 楽章は、通奏低音のシンプルな前奏を受けて、フルートが気品を湛えた旋律を歌う。第 4 楽章は、澁刺とした舞曲調。小気味よい通奏低音との掛け合いが聴きどころ。

### フルートと通奏低音のためのソナタ BWV1035

作曲年は諸説あるが、ケーテン時代の 1720 年頃とされる。4 楽章構成で、第 1 楽章は、ゆったりとした旋律に魅力があふれている。第 2 楽章は、流麗な冒頭モチーフが印象深い。第 3 楽章は「シチリア風」という意味の古い舞曲で、ためらいがちに揺らぐようなリズムが特徴的。第 4 楽章は澁刺とした音楽で、明るく曲を閉じる。

### 無伴奏フルートのためのパルティータ

1722～23 年、ケーテン時代の終わり頃の作とされる。バッハ唯一の木管楽器による無伴奏作品で、4 つの舞曲が並ぶ。通常はジグで終わる最終楽章が「ブレー・アングレーズ(イギリスのブレー)」となっているので、バッハが最終楽章を書かなかったのではないかと考える向きもある。全楽章を通してほとんど休符がなく、高い演奏技術を要する。

### トッカータ BWV912

7 つあるバッハのチェンバロのためのトッカータ(BWV910-916)のなかでも最初期のもので、アルンシュタット新教会のオルガニストを務めていた時代(1707 年頃)の作とされる。トッカータ(試し弾き)らしい即興的な走句の導入にアレグロ、愁いを帯びたアダージョが続き、フーガとトッカータ風のコーダ、そして 16 分の 6 拍子によるジグ風のフーガから超高速のコーダに入り、最後は 2 小節のカデンツで落ち着いて曲を閉じる。

### フルートとオブリガート・チェンバロのためのソナタ BWV1032 (A.デュルによる補筆版)

1720 年頃、ケーテン時代の作とされる。第 1 楽章の後半部分が逸失しており、ベーレンライター社の新バッハ全集(2007 年刊)の校訂に携わったドイツの音楽学者アルフレート・デュルが補筆した。急／緩／急という 3 楽章形式を採用しており、快活な両端楽章に挟まれた第 2 楽章ラルゴ・エ・ドルチェでは、美しい旋律を聴かせる。

### フルートとオブリガート・チェンバロのためのソナタ BWV1030

ケーテン時代にト短調の曲として書かれ、ライプツィヒ時代(1735 年頃)にロ短調に改められた。バッハのフルート・ソナタのなかでも人気が高い。第 1 楽章アンダンテは、冒頭

の旋律が有名。第2楽章ラルゴ・エ・ドルチェは、心に染みわたる主題が印象的。第3楽章は、前半のプレストから後半はアレグロのジグへと続いて、曲を締めくくる。